

たんの小史

ふるさと端野

④

「ヌプウンケシ(野のはし(端))」

端野の起源

北海道が「蝦夷」と呼ばれ、和人(日本人)がこの地に渡来するまでの蝦夷地は、アイヌの人たちが主人公でした。

アイヌの人たちがいつ頃蝦夷地にやってきたのかは、はっきりしませんが、うっそうたる森林とこれを縫って流れる常呂川は、狩や猟の好適な生活の場であったようです。

北見地方におけるアイヌの人たちの記録は、安政三(一八五六)年、松浦武四郎(※注1)が蝦夷地調査の記録をまとめた「東西蝦夷地廻浦日誌」と同五(一八五八)年、オホーツク内陸部を踏査した記録「戊午登古呂日誌」があり、当時の自然環境や地名、アイヌの人たちのコタン(集落)や暮らしぶりなどが記されており貴重な記録です。

この日誌の中で、特に注目すべきことは、「常呂川沿いのアイヌコタンでは戸数やアイヌの人たちが著しく減っており、

残された家族は老人と子どもがほとんどで、青年や壮年の人たちは男女を問わず紋別や宗谷の漁場に強制的に駆り出されている」という記録で、当時のアイヌの人たちが蝦夷地を統治していた人たちに圧政を押し付けられていたことを知ることができます。

明治元(一八六八)年、明治政府は蝦夷地を管轄する行政機関として「箱館裁判所」を設置し、翌二年七月、蝦夷地を「北海道」に改称し、箱館裁判所に代わる「北海道開拓使」を設置しました。

これに併せ北海道を一一国八六郡に分割し、この北見地方は「宗谷、利尻、札文、枝幸、常呂・網走・斜里」の八郡が「北見国」となりました。

以後、同九(一八六八)年、全道を三〇大区一六六小区の行政区に改め、村名はコタン名を漢字で命名することとなり、常呂郡七つの村のうち、「ノツケウシ(ヌプウンケシ、ヌツケシともいわれていた)」が「野付牛」と命名されました。

この「野付牛」は、現在の北見市の前村(町)名で、旧端野町の母町名でもあります。

また、明治二五(一八九二)年、上川から網走までの中央道路が開削され、この道路の要所に「駅通」が設けられ、端野区域内(国道三九号、東一七号線交点

附近)に設置された駅通の名称が「端野」と命名されました。これは駅通の近くに「ヌプウンケシコタン」(端野町忠志 村 中重義氏宅付近といわれています)があったことから命名されたものといわれています。

「ヌプウンケシ、またはノツケシ、ヌツケシ」は、アイヌ語で「野のはし(端)」という意味で、これを漢字で表記したのが「端野」で、大正一〇(一九二一)年四月一日、当時の「野付牛町」から分村し、新しいむらづくりをする際に村名にしました。

田中 誠



注※1

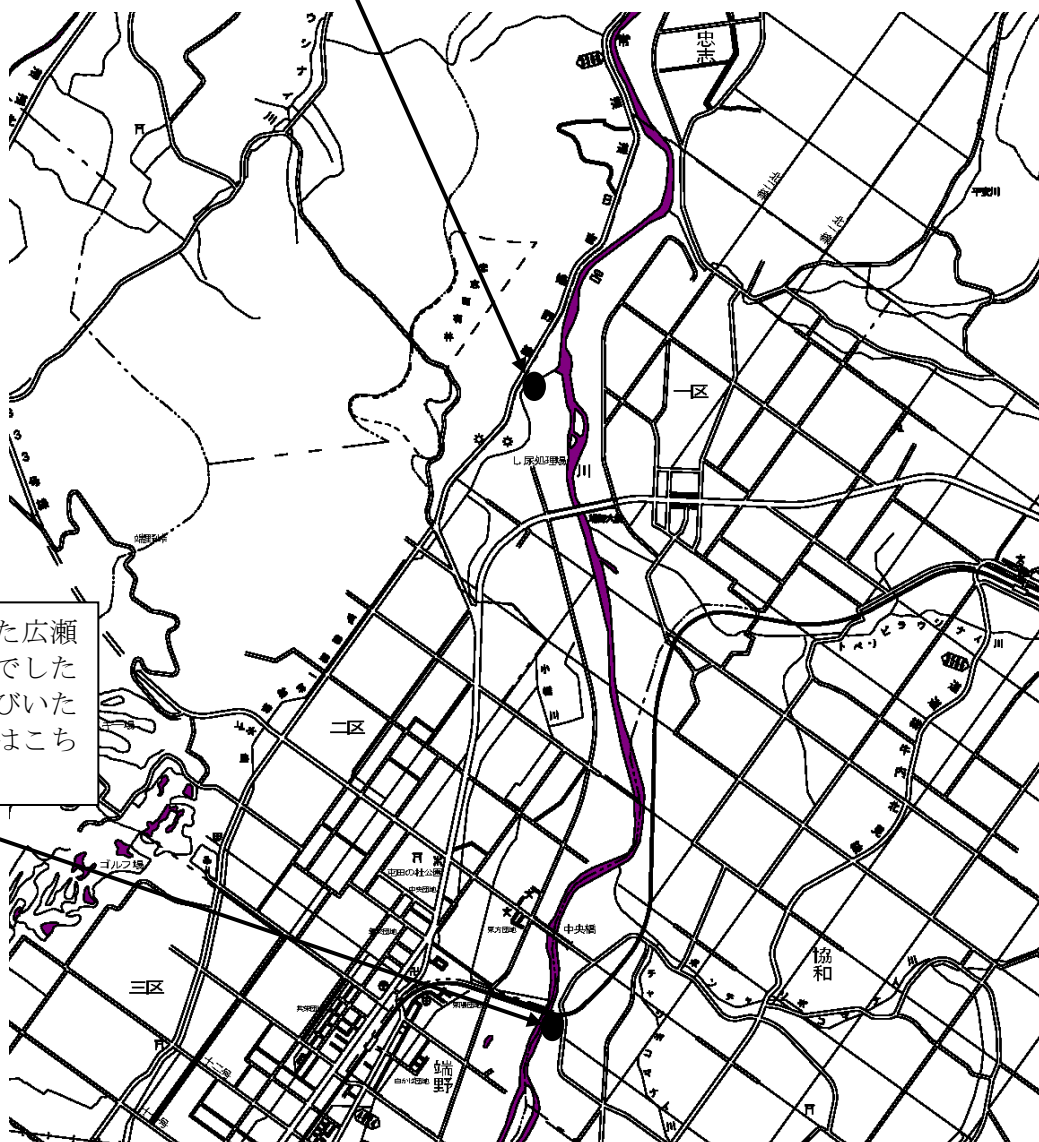
◇松浦武四郎

文化一五（一八一八年）、伊勢国一志郡須川村（現在の三重県松阪市小野江町）にて生まれる。一七歳から二六歳までは全国を巡り歩き、二八歳から四一歳までは六度に及ぶ蝦夷地（北海道）の調査をしました。明治二（一八六九）年に開拓判官として任命された武四郎は、蝦夷地に替わる名称として「北加伊道」「日高見道」、「海北道」、「海東道」、「東北道」、「千島道」の六つの案を政府に提案し、その案を元に「北海道」と決定したとされています。

蝦夷地については「初航蝦夷日記」「再航蝦夷日記」「蝦夷大概図」「丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌」「知床日誌」「東蝦夷日誌」「西蝦夷日誌」など膨大な出版物があります。



旧跡 ヌプウンケシコタン



先月号でお知らせした広瀬遺跡発掘場所が誤りでしたので、訂正してお詫びいたします。正しい場所はこちらです。